草ひきむすぶ（小野の雪）　伊勢物語八十三

昔、水無瀬にかよひ給ひし惟喬の親王、例の狩しにおはします供に、右馬の頭なる翁つかうまつれり。日ごろ経て宮にかへり給うけり。御おくりしてとくいなむと思ふに、大御酒たまひ、禄たまはむとてつかはさざりけり。この馬の頭心もとながりて、

枕とて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくに

とよみける、時はやよひのつごもりなりけり。親王おほとのごもらであかし給うてけり。

かくしつつまうでつかうまつりけるを、思ひのほかに御髪おろし給うてけり。む月にをがみたてまつらむとて小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば雪いと高し。しひて御室にまうでてをがみたてまつるに、つれづれといと物がなしくておはしましければ、やや久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひ出で聞こえけり。さてもさぶらひてしがなと思へど、公事どもありければ、えさぶらはで夕暮にかへるとて、

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきやゆきふみわけて君を見むとは

となむなくなくきにける。

在原業平という人名ではなく「右馬の頭」という職名で描写されるのも平安文学の特徴。（現代でも「先生」「部長さん」などとはいうが人名を直接呼ぶのは憚られる感じがある。源氏物語などでも同一人物なのに時と共に職名が変わり紛らわしい。）業平と惟喬親王はいとこ同士にあたり、業平が十九歳年上。惟喬親王は文徳天皇の第一王子であったものの、藤原氏方の皇太子が立てられたため、失意のうち二十九歳の頃出家した。小野は現在の大原の南のあたりで今も惟喬親王の墓がある。さて、この業平の歌に対する惟喬親王の返歌が新古今和歌集にある。

世をそむきて小野といふ所に住み侍りけるころ、業平の朝臣、雪のいと高う降りつみたるをかき分けてまうできて、夢かとぞ思ふおもひきや、とよみ侍りけるに、惟喬親王

夢かともなにか思はむ憂き世をばそむかざりけむ程ぞくやしき

1 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べること。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。タイトルも段番号も元々は書かれてないので、教科書によって違いがある。

2 水瀬離宮（別荘）があり、親王はいつも宮中から通っていた

3 太陽暦では五月位で春の夜は短い。秋の夜で「さえ」たのめないような、ぐずぐずしていると早く明けてしまう春の夜なのですから

4 新年の拝礼し申し上げよう